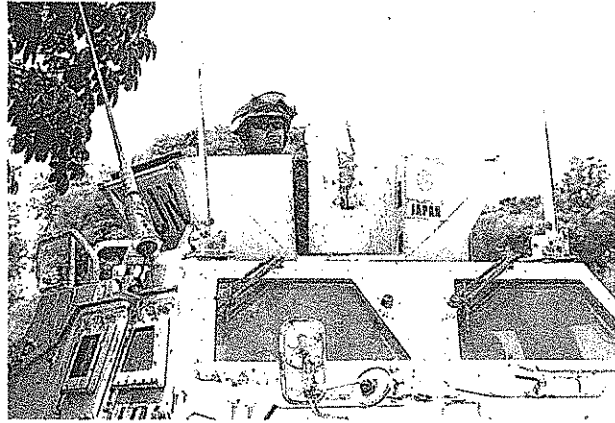


# 南スーダンPKO

## 陸自参加4年



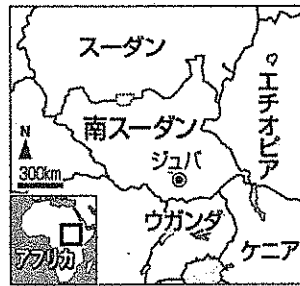
南スーダン・ジュバで、装甲車から付近を警戒する陸上自衛隊の隊員。3月8日

# 秋以降 新任務か

陸上自衛隊の施設部隊が、南スーダンの国連平和維持活動（PKO）に加わって4年以上がたつ。日本が参加する唯一のPKO。安全保障関連

## 内戦に翻弄先見えぬ

法で、武器の使用を想定した新任務が自衛隊員に適用される初めての現場となる見込みだ。隊員らは南スーダンの内戦に翻弄され、「国造り」の支援に主眼を置いた当初の任務は大きく変容。終わりの見えない活動が続いている。強い日差しが照り付ける首



所を重機などで整備していた。南北スーダンの内戦を経て、2011年に誕生した世界で最も新しい国でのPKO。当初は政府の統治能力向上と国家の安定を活動の目的としていた。

しかし13年12月、南スーダンは内戦状態に陥った。陸自施設部隊の宿营地近くにも市民が押し寄せ、全隊員に武器携行命令が出たこともあった。国連はPKO施設内に避難民を受け入れ、市民保護を最重要任務に変更。部隊は一時、施設内に活動を限定し、避難民支援に追われた。当時の陸自部隊幹部は「国造りが後退した」と語った。

現在のジュバは治安が比較的落ち着き、隊員らは「危険を感じたことはない」と口をそろえる。ただ任務は国造りに直結するインフラ整備よりも、PKO司令部につながる道路の整備などPKOそのものや国連の人道援助の後方支援が主体に。作業中は装甲車の上から隊員が、厳しい表情で周囲を警戒する。

安法法施行で「駆け付け警護」や、他国軍と共同で行う宿营地防衛などの任務が付与されるのは秋以降とみられる。陸自部隊関係者は「安法法で注目が集まるのは当然だが、部隊がどうPKOに貢献しているのかも知ってほしい」と話した。

（ジュバ共同＝稲葉俊之）